九大医学部で学んだジョナイドさん

母国で診療所開設へ

善意で機器もそろい

あすバングラへ旅立ち

バングラデシュから九大医学部大学院に留学、今春修了した麻酔科医ジョナイド・シャフィックさん(三)が今年七月、首都ダッカに貧しい人々向けの診療所を開く。建物確保で非政府組織（NGO）の協力を受けたり、バングラデシュで入手できない高度の医療機器を中古品でもらったりしてめどがついた。同国の医学留学生の多くは、高収入を求めて欧米に流出するが、ジョナイドさんはあえて厳しい道を選び、二十九日帰国する。

ジョナイドさん

病院は、東大、琉球大に留学した外科医の仲間二人と協力して開設する。五年前に来日した時から、「日本もかつて貧しい国だった。我々も努力次第で母国の医療水準をあげられるはず」と誓い合った仲だ。三階建てでベッドは三十床。週一日は、生活に苦しむ人たちを無料で診療する。

診療所開設に向けて、ジョナイドさんたちは、NGOの「アジア医師連絡協議会」日本支部（本部・岡山市）に支援を依頼、建物を借りることができた。

問題はバングラデシュでは手に入らない高価な医療機器。ジョナイドさんが灸（きゅう）を習っていた福岡市の原土井病院の紹介で、市内の病院などに協力を呼びかけ、超音波断層検査装置、酸素テントなど五十八点が集まった。さらに、北九州市門司区の海運会社が、ダッカまでの運送を原価で請け負ってくれた。

原土井病院の山家滋医師（三）は「ジョナイドさんは、米国でも通用する腕の持ち主。数百倍の収入に見向かず、新病院をつくる心意気に感動しました」と話す。

ジョナイドさんによると、人口約七百万人のダッカで、総合病院が約十、個人病院が約五十しかない。検査装置が不足し、伝染病の診断やがんの早期発見も難しい。海外留学したバングラデシュ人医師の八割が、学んだ医学が生かせないため欧米で就職するという。

ジョナイドさんは将来の夢を、「日本の政府開発援助で、ベッドを五百床に増やし、完全無料の病院にしていきたい」と語る。診療所の名前を「日本バングラデシュ友好病院」と名付けた。